「馬乳酒からみる遊牧世界　―サステナブルな遊牧を支える遊牧知の検証―」

森永由紀　明治大学・商学部

１．なぜ馬乳酒の製造法を検証するのか

寒冷かつ乾燥という厳しい自然環境下で、モンゴルの人々は数千年にわたって遊牧を続けてきた。かつてアジア・アフリカの乾燥地域では広く遊牧が行われていたが、近代化とともに定住化がすすみ、遊牧が基幹作業として今も残るのはモンゴル国のみである。草と水を求めて家畜とともに草原を移動する遊牧は、土地にかける負荷を広く薄く分散するために、持続的な土地利用形態とも評価され、食の安全や「家畜福祉」という意味でも注目される。厳しい自然環境下で、寒さをしのぎ、食料を得て、かつ自然を荒廃させないためには、「遊牧知」とよべるような伝統的な知識があるはずで、私達のグループは、それを検証するための研究を行ってきた。そのうちの一つが、伝統食である馬乳酒の製造法の検証である。

馬の生乳を発酵させて作る馬乳酒は、クミス、アイラグ、チゲー等とも呼ばれる薬効のある低アルコール飲料である。夏は乳製品、冬は肉製品を中心に摂るという食生活を伝統的に営んでいたユーラシアの騎馬民族に広く飲まれてきた。今でもモンゴル国では、夏は馬乳酒のみで過ごす人がいるほどで、薬効だけでなく栄養価とビタミン C の高さでも知られ、儀礼では大切に用いられる。しかし、20 世紀に遊牧が廃れた旧ソ連諸国や内モンゴル自治区では、馬乳酒は家庭から消え、サナトリウムや家庭に供するために工場で作られる健康飲料となった。（定住化してもヒツジ・ヤギ・ウシの飼養は続くが、広い草地を必要とするウマやラクダの飼養はモータリゼーションの影響とあいまって激減する。）例外は、生業としての遊牧が残るモンゴル国で、そこでは今も馬乳酒が家庭において伝統的製法で作られる。一方、20 世紀末の社会の変革の波はモンゴル国での馬乳酒製造にも影響を与え始めており、馬乳酒の伝統製法を検証・記録・継承していくことは喫緊の課題である。近年、都市化が進むにつれ、家畜を持たない都市住民による馬乳酒の需要が高まっているが、研究協力者の Chimgee,D.が実施した馬乳酒製造に関するアンケート（Tuv 県にて、492 名）によると、馬乳酒の名人のように上手に馬乳酒を作りたいと答えた人の割合は、約 8 割に上る。カシミヤと同様の現金収入を得られることも一因と考えられる。後述の全国調査では、馬乳酒を作らない地域の中には、ウマの飼養の適地であるなしに関わらず製造しない理由として「技術がない」という回答例が多く、技術移転を行うことで馬乳酒製造の継承ができる可能性がある。また、馬乳酒の検証は伝統文化の継承のみならず、微生物の多様性保全、環境保護、健康向上、経済振興など、社会が抱える課題の同時解決につながることも期待できる。

２．馬乳酒の製造に関する全国調査

「モンゴルといえば馬乳酒」といわれるほどの伝統食でありながら、自家生産・自家消費される馬乳酒は、牛乳製品と異なり生産量などの統計はない。そこで 2012 年、モンゴル国における馬乳酒生産の地理的偏差について、気象水文局のネットワークを通じて全国各地の馬乳酒生産に関する質問紙調査を実施した（329 郡の 2050 戸対象）。モンゴル北部のス

テップ地域ではウマが分布しているにもかかわらず、製造が盛んな地域は中央部に限定され、東部ではほとんど作られない。一方、南部の砂漠草原では適地でないにもかかわらず、ある程度作っている。これらは、馬乳酒製造が単にウマの多寡に現れる自然環境だけに制約されてはいないことを示す。つまり、厳しい気候環境下でも、牧民が自然に働きかけながら人間の社会的・文化的嗜好を食生活の中で成り立たせていることがみてとれる。社会的・文化的嗜好として、具体的には、ウマ飼養の用途、祭事、民族などが想定され、自然環境とあわせてこれらを調査することで、牧民の自然への働きかけの理解が深まると考えられる。また、この調査では、馬乳酒製造に重要な条件として、労働力、スターター、技術、容器、草、天候、ミネラル、雌馬、などがあげられたため、これらを参考に今後の検証の枠組みを作り、調査を継続している(Bat-Oyun et al.,2015,Nomadic Peoples)。

３．名産地の名人による馬乳酒の製法

馬乳酒名産地では、製造法と環境条件、ウマの行動の関係の解明を進めている。草原で粗放的に放牧される馬乳酒製造用の家畜ウマの群れの動きには、遊牧民の管理手法や環境条件、隣家の家畜との関係などが影響すると考えられる。そこでの隣接する遊牧民が所有する家畜ウマに位置追跡用の全球測位システム（GPS）ロガーを装着し、ウマの行動と環境条件の関係やその季節変化、隣家間のウマの空間利用の実態を明らかにすることを目的とした。

馬乳酒の全国的名産地の一つである、モンゴル国北部のボルガン県モゴド郡のN氏宅で、馬乳酒生産用のウマの GPS 追跡を実施した。馬乳酒製造期間中のウマの環境利用については、3 組の母子ウマの位置を 2013 年 6 月 25 日～9 月 21 日に 1 分間隔で記録した。ウマの利用場所の季節変化と隣家間関係については、隣接する 2 軒の遊牧民の雌ウマ各 1 頭の位置を 2016 年 3 月 9 日~2017 年 9 月 4 日に 1 時間間隔で記録した。毎正時の自動気象観測と、周辺の植生調査を 2013 年の 6～9 月に毎月 1 回実施し、追跡ウマ所有家庭を対象に馬乳酒製法についてのヒアリングも行った。馬乳酒用の搾乳は夏（6~9 月）のみに行われ、それ以外の季節にウマの群れに人が関与することは殆どなかった。搾乳期間である夏には、日中に仔ウマたちをゲルの前に繋ぎ、傍に寄り添う母ウマから日に数回搾乳し、夕方から朝までは母子を草原に放すという日帰り放牧が実施された。2013 年夏の 1 日の行動圏半径は平均 3.2 km で、6 月末から 8 月中旬頃までは川沿い、それ以降の 9 月中旬までは丘の上が中心だった。放牧中の母子間の距離は子ウマの成長とともに大きくなり、6 月末は 100 m 以内だったが 8 月末には 1000 m を超えることもあった。隣接した遊牧民が所有するウマの行動圏は隣接したが、どの季節も行動圏の重複率は小さかった。搾乳は仔ウマのための乳を人間が横取りする行為だが、馬乳酒製造用のウマの群れは、きわめて自由度の高い方法で飼養されていた。良質の植生環境の効率的な利用の観点だけでなく、母子間の関係も良好に保たれているようであり、家畜福祉の観点からも興味深い。隣接遊牧民が所有するウマの草原の使い分けは、良質な馬乳酒生産や草原管理上、重要な伝統的知識が存在する可能性を示唆する(森永ほか、2018 年秋季地理学会予稿集)。